



「営みを描く」=何でもない絵=

酒井 貞（さかい ただし）

技術士：建設部門（都市および地方計画）一級建築士

起-絵と仕事

まず、CVVのホームページのギャラリーからご覧いただきたいと思います。かつて、ぼくのスケッチの何枚かを掲載していただいたのですが、近作を追加していただきました。

ぼくのスケッチ歴は、93年ごろにさかのぼります。以下に紹介するような手頃な大きさのスケッチブックとの出会いから始まり、未だにそれが続いています。それまでにも、建築学科の出身ということもあって、たまにはスケッチを試みることもなくはなかったのですが、なかなか手頃な手法や画材に巡り会いませんでした。こういうことは、偶然の出会いから始まるのですが、梅田地下街の画材店で出会ったものでした。それから考えてみると13,4年になるということになります。作品は、200枚ぐらいにはなっています。その間、色んなことを試みかつ考えて来ました。絵への思いなど振り返ってみることにしました。案外、それが、ぼくのやってきた本業の底流に流れる想いと似たものかなと思い始めました。少し毛色が変わった「CVVな男」のプロフィールを感じていただければと思う次第です。

承-スケッチのすすめ

そこで、スケッチの効用から話に入って行きたいと思います。これから始めようかと、むずむずしておられる方のためのヒントにもなればというアプローチです。

ところで、ぼくのスケッチですが、約18センチ角の小さいスケッチブックを持ち歩いて描いています。厚手の比較的凹凸のついた画用紙です。

「APOLLO HANNDY BOOK SERIES/HE-SQ（株）アポロ製」

小さなインナーバックに、鉛筆（主としてB3, B4）、鉛筆削り、芯ホルダー、ペン、消しゴム、絵筆3本、小さい12色の固形水彩絵の具（パレット付き）、水入れ、こんなものが入っています。たったこれだけですが、ちょっと出かけるときには、ほとんどいつも、もっています。

ぼくの絵は、輪郭線のある水彩による淡彩という画法です。その線を描き出すのに、この頃は、STAEDTLERのホルダーにB3かB4の芯をいれて描いています。紙との相性がいいようです。線を引くのに鉛筆かホルダーか、このごろ油性のペン（太さのバリエーション豊富）が出てきたので大いに迷いました。今も迷っています。しかし、今では、その時々気分や対象物によって使い分けることにするという結論に達しています。鉛筆とペンでは、作品の風合いが、はっきり違ったものになります。大まかにいえば、鉛筆の柔らかさ、ペンの硬さの差です。ホームページのギャラリーの絵に両者を混ぜています。感触の違いをご覧いただければ、ありがたいと思います。

これはという景色に出あうと、ほとんど場合、立ったまま描いています。一箇所で費やす時間はせいぜい15分から20分というところでしょうか。同行者がいると、もっと短い時間を余儀なくされます。あまり待たせるわけにはいかないからです。時間のあるときは、その場で淡彩を施します。多くは、その場で色のメモを画面にするか、デジカメに記録して帰宅して着色作業をやります。（写真から絵をつくることは、厳禁です。）

こうして続けていると、スケッチには、図り知れない色々な効用はあることがわかってきました。

={集中力}=まず、モノ（対象）をよく見る習慣がつくことです。今言いましたように、絵を描いている時間は短いのですが、その間は自分とモノとが一体となって強い集中状態になると思います。だから、その風景を、後日、写真よりもリアルな臨場感をもって思い出すことができるような気がします。これは、集中力を高めるという効用です。（ぼけ防止にもなると思います。）

={交流}=立ってスケッチしていると、後ろからのぞき込んでくる人がいます。はじめは恥ずかしいと思っていましたが、この頃では、やや厚かましくなって平気になりました。そして、その人と、思わぬ話が弾む楽しみが出てきました。かなり、以前の話ですが、香港の海岸でスケッチしていると、タイ国の若い学生がのぞき込んできて、話したこともありました。（かろうじて英語が通じました）こんな楽しみがわいてきます。一年一回、15枚ぐらいを大学OBの絵画同人展に出展するという新しい交流も始まり、今も続いています。

={脳の活性化}=はじめは、何とも格好がつかなくて、という状態だったのですが、続けることによって、お見せしている程度のものになりました。対象も風景にランの花が加わり広がりました。

ちょっとした決心と持続によって、新しい楽しみをもつことができると思います。いわゆる脳の活性化にもつながるのではないかと密かに思っています。

これが、ぼくのスケッチのすすめです。

転「営み」を描く=何でもない絵=

こんなスケッチ作品を、今年も、大学OBの同人絵画展へ出品することができました。17枚ほどです。半分が風景画、半分が、ランの花を「花譜」風になんまり正確に描写をしたものでした。出展できることが、元気の証拠のような感じがします。(GVVホームページ・ギャラリー参照下さい)

このように、今では、スケッチは、ぼくの生活の一本の柱になっています。そして、最近、どんな考え方、気持ちで絵を描いてきたのかなと振り返って見る気分になりました。



(蒜山・サイロと大山)

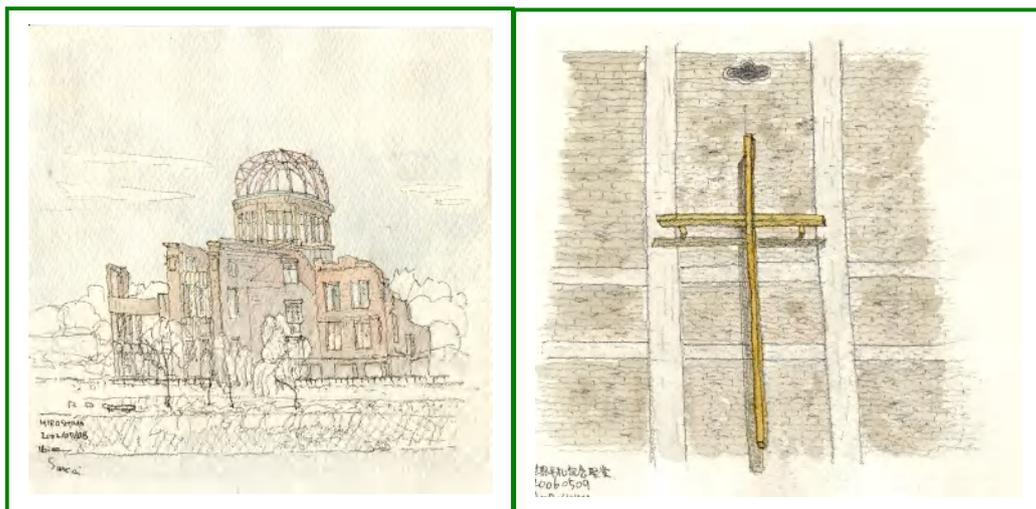
(勝山の街道)

まず、風景。主に「何でもない風景」を描いているのが、特徴だと自分では思っています。一生懸命、美しい絵になる風景を探そうとは思っていません。どこでも何でも良いと思っています。風景画は、「人間の営み」の断面を切り取ることだと思うからです。蒜山高原の風景には、蒜山の人々の様々な「営み」の結果が、現れています。サイロと大山の絵など、その典型だと思っています。酪農が重要な産業になっていますが、この絵にはその歴史がにじみ出ているように思います。雄大な大山と相当年期の入った風格も感じるようなサイロや牛舎の対比に、着眼しました。(ご縁があって、蒜山に所在する某建設コンサルタント会社の手伝いをしています)。

蒜山の隣に位置する勝山の町並みも同じです。絵に見えている向こう側は、趣(おもむき)のある街道です。その裏側の家並みをさりげなく眺めたもので

す。昔からありそうなガラス屋さん等の営み、信用金庫の看板塔など、何気ない普通の生活、営みがにじみ出ているように思います。玉石積みの護岸もなつかしものです。そういうものを敏感に感じ取る、そして、それを絵の素材として画面構成するということなのだと思います。

これを、「[営み]を描く-何でもない風景-」と特徴づけしようかと思っています。ほとんどの風景は、「人の為せる結果=営み」と考えられるからです。



〔原爆ドーム〕

〔世界平和記念聖堂(広島)〕

人間の営みには、おぞましい「戦争」という営みもありました。今も、中東やイラクなどで続いています。原爆ドームは、そのもっとも悲惨な結果の遺産です。スケッチしたのは、ドーム周辺の緑もキラキラと輝く真夏でした。しかし、その輝く緑の着色をする気には、どうしてもならなかったことを思い出します。(画面の手前の塗り残した木や護岸)

そして、世界平和記念聖堂(広島)は、その鎮魂の為に集めた人智の結晶です。その訪問記はホームページ・文芸ランに掲載されています。訪問時に、その象徴である聖堂外壁正面の十字架だけスケッチしました。人間がやってしまった究極の破壊という、おぞましく悲しい人間の営みの結果と、その鎮魂の営みです。その両方を素直に描き留めた絵だと思っています。スケッチは、折しも、8月、われわれ年代の人間にとっては、戦争が敗戦に終わったという重たい月でもありました。

普通の人々の営みのドキュメントと異常な悲惨な人間の行為の結果と両極にあるようにみえますが、今後も、何気ないもの、重要なものを見つめる「心」と「まなざし」のみずみずしさを失わないようにしたいと考えています。

ちょっと話がそれますが、この春、「藤田嗣治」の展覧会を見たことを思い出

しました。そのとき買った画集の中にこんな言葉を見つけて、ぼくの考え方に対して勇気をもたらったような気がしました。それを引用しておきます。

『乞食を描いても傑作はできる。裏長屋の物干しを描いても名画になるところに面白いところがある。吾等はいわゆる世の中の人が汚いというものを美しくみる方法を知っている。構図の面白さ、色の配合から物を見てもいいわけである。世間の人とは同じ見方で見ておらぬ。』「腕一本」（1936年）より引用。

結-仕事への想いと絵

ぼくの現役時代の主な仕事は、前半は、某シンクタンクでの広域的な地域計画・構想の策定、後半は、建設コンサルタントでの土木と建築の中間領域の課題へのアプローチという感じに大別できます。

前者は、「関西文化学術研究都市」の端緒となった元京大総長奥田東先生の主催された通称「奥田懇談会」＝「関西学術研究都市懇談会」（79年ごろ）の事務局の手伝いから基本構想の策定に参加できたことが、ぼくにとってはかけがえのない勉強の機会であったこととして、忘れられません。モノを広く、長期的な視野で、しかも文明論・文化論として考えることを、錚々たる諸先生の意見を集約しながら、深く学ぶことができたことは、今もこの上ない幸せだったと思っています。

後半では、第二京阪道路の景観計画について参加の機会があったことです。その時代には、「景観」という課題が世に登場しつつありました。「緑立つ道」（89年ごろ）というニックネームを冠して、土木構造物（高架橋など）、沿道植栽、沿道との一体的空間整備などの「総合的な景観形成」の理念の構築と具体化を提案しました。委員会をつくって各界の意見を集約するという作業の面白さ大変さの経験も、いまでは懐かしく思っています。景観の考え方の中に「エイジング」（＜人工物について、時が経つに従って劣化せず、むしろ美しくなるべき＞というデザインの考え方）の考え方を提示したのは、今でも先駆的ではなかったかと思っています。土木と建築の境界領域の仕事のひとつであったとも思っています。

そして、両プロジェクトとも、眼に見えるかたちで、立ち上がって来ているの感慨深くウォッチングさせてもらっています。

上記のプロジェクトの他、様々な構想づくりや計画にもコミットしました。振り返ってみると、どれも、どちらかといえば、既存の考え方では解きにくい課題が多く出てきました。その時代の社会経済的背景からにじみ出てくるよう

な問題が多くありました。その頃は、まだ、成長を前提としたモノ（人工物）づくりの時代でした。そして、環境問題、景観問題などなど、開発による新しい矛盾、そして克服すべき課題が次々に出てきたような気がします。それらの諸課題の解決に何らかの方向性を見つけ出す仕事が増えました。

ここで、絵の話にもう一度もどってみます。風景に向かって描き始めるとき、対象をよくよく眺めます。そして、着眼点を探します。何か、これが描きたいのだというポイントを探します。そして、しばらくすると、見つかります。ぼくは、そのポイントから描き始めます。そして、多くの場合、いわゆる構図には、あまりこだわらずに、一点突破型で描き広げていきます。画面の端の方は、建物が切れてしまって中途半端になることもあります。しかし、描きたいモノは、しっかり存在しています。こうして一枚の絵が成立します。かなり、粗っぽいと思うのですが、対象物の本質を捕まえた、初動の動機となった描きたいモノを捕まえたという絵は成功です。

仕事の話にもどります。今思えば、新しい課題にいつもぶつかっていたように思います。そのとき、問題をいろいろな角度から観察し、考察するということの繰り返しのなかから、絵の場合の描きたいモノ＝問題の本質にたどり着くことになりました。という経過によって見つけた「キーコンセプト」とでもいうべきモノに引っ張られて、一気に仕事が動き出す経験をしました。

さらに、「何でもない風景を描いている」ともいいました。人の営みの為したものを見つけるともいいました。仕事の場合も、普通の人の営みにかかわることとして、一生懸命、試行錯誤をしていたようにも思います。歪み（ひずみ）を普通の当たり前の状態へもどすという話に落ち着くことも多くあったような気がします。「エイジング」という考え方も当たり前の状態を創り出すということだったかも知れません。

こうして考えてくると、結局は、今も昔も同じことをやっているな、という感じがします。どちらも、「[営み]を描く」というキーワードで、因数分解できるのかも知れません。

CVVの活動も、この延長線上にあるように思います。「栗東新幹線駅整備構想コンペ」、「大阪北ヤードのコンペ」への参加などがそれです。前者は、「ホロニック」の考え方にたどり着きました。後者では、「知の天守閣」形成という考え方に到達しました。今は、御堂筋のあり方を出発点に、近畿全体の「ホロニック・ネットワーク構想」を「キーコンセプト」として、まとめたり気配になってきました。各々の「ホロン」には、それぞれの「営み」があり、それが緩くつながり合うという構図です。

月一回の MID グループ例会で継続的に、メンバーの知恵をいただきながら、まとめの段階に入っています。その全体構想の中では、御堂筋が未来に果たすべき役割を含めて「22 世紀への伝言」として、とりまとめたと思っていますところ。

大量の駄弁の山を築いてしまいました。お許しあれ。以上。

酒井 貞さんのこと

私と酒井さんとの出逢いは、はっきりと認識しあったのは CVV でした。と、言いますのも、実はそれ以前に近畿地建や阪神高速の仕事で、お世話になっていたのです。

CVV の創成期に、隅野さんの大阪ガス生活研究所（？）の会議室で、喧々譁々話し合っていた中で、〈あの一お〉で始まる酒井さん独特のお話は、とんでもない方向に進んだ話を原点に戻し、隅野さんたちの難しい話を易しく、小生の稚拙な話を格調ある話に変換してくれたものです。

そんな時、中尾さん前から知ってますよ、と言われ認識を新たにしました。

それからは、老人生活の先輩として、あらゆる面でご指導いただいています。

2 年前でしたか、お住まいを大阪府八尾から京都に移られて、終の住処を確保。学友、建築仲間との交流、歴史探訪、合唱団、特に絵画は益々冴え街絵 100 作を目指して制作中です。押し付けがましくなく、依りかかることもなく、自分を摂生し、良く学ぶ（知識欲旺盛）絶妙のバランスが魅力です。淡々と人生の完成を目指して生きている姿勢に共感を覚えます。

いま、御堂筋プロジェクト（MID）で、ご一緒していますが、御堂筋の研究が 22 世紀の御堂筋探し、さらに 2100 年の大阪を考える。とてつもない大きなテーマになってしまいました。酒井さんに引っ張ってもらい、みんなで彼のお尻を押しながら完成を目指しています。まちづくりグループで完成した、いま話題の新幹線栗東新駅周辺開発企画コンペ挑戦、大阪駅梅田ヤード企画コンペ挑戦、などニュースで話題になると、グループのメンバーとして心の底で充実感、誇りのようなものを感じているのは小生だけではないと思います。

酒井さんとの出逢いを感謝します。